

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ホタル

2001 (平成13) 年6月2日鑑賞

Data

監督：降旗康男

出演：高倉健／田中裕子／夏八木勲

／奈良岡朋子／中井貴一／

小林稔侍

👁️👁️ みどころ

特攻隊—知覧—鳥浜トメというキーワード。テレビの人気番組『知ってるつもり』を見た人にはわかる筈……。1945年8月15日。この日を今の日本の若者はどう考えるのか？それを真剣に考えさせてくれる絶好の作品。涙なくしては観られない筈だ。高倉健と田中裕子の夫婦愛と、しっかりとした渋い演技には脱帽。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<8月15日という日>

今年、2002 (平成14) 年もまた8月15日がやってきた。1949 (昭和24) 年に愛媛県松山市で生まれた「戦後」生まれの私は、もちろん1945年8月15日の終戦記念日 (敗戦記念日) という「その日」を知らない。しかし、物心ついた頃、父や母から聞いた松山空襲の話などにより、子供心にも戦争の「体験」感がある。

そして、中学・高校時代、愛光学園という私立男子校、6年制一貫教育の受験校の中で、学校と親の両方から、いつも受験勉強にハッパをかけられながら、どこかでそれに反発し、1人で小説を読み、映画を観る生活 (反抗) を続ける中で、私は私なりに「戦争」というものを数多く「学習」した。私が学習した戦争は、「太平洋戦争」と呼ぶのか「大東亜戦争」と呼ぶのか、それとも「日中戦争」、「15年戦争」と呼ぶのか (平成14年8月14日産経新聞「正論」、松本健一教授による『「大東亜戦争」敗れたり』の論文参照) は別として、私たちの親が否応なく体験した、「あの戦争」だけではない。日露戦争の映画、日中戦争の映画、パール・ハーバーの映画、太平洋戦争の映画、ノルマンディ上陸作戦の映画、Uボートの映画、ヒットラーの映画、イタリア独立戦争の映画、ヨーロッパ戦線の映画……。

とにかく、数えきれないほどの多くの戦争モノの映画を観る中で、私は私なりの戦争を学習したのだ。

<集中講義「都市法政策」の統一テーマは「戦後56年」>

私は、2001（平成13）年12月7日～10日、私の故郷の松山にある愛媛大学法文学部において、「都市法政策」の4日間の集中講義を行った。この講義の統一テーマは、①破綻する都市再開発、②小泉改革・小泉都市再生、の他に③戦後56年だった。この「戦後56年」というテーマは、今時の学生にとってはいささか重いものだっただろう。しかし、2001（平成13）年という年は、1931年9月18日の柳条湖事件（満州事変の開始となった、日本の関東軍による瀋陽郊外にある柳条湖付近での線路爆破事件）から70年、1941年12月8日のパール・ハーバーから60年、1951年のサンフランシスコ講和条約締結から50年、など多くの意味での節目の年だった。

また別の視点からは、戦後、平和と自由と民主主義を謳歌し、経済成長を十分に楽しんできた日本人や日本という国が、今や、政治・経済・行政・司法・文化・教育・軍事などあらゆる面で行き詰まりを見せ、真の構造改革を実行しない限り、「日本丸」の「沈没」まで予測される状況になっていることを確認させられた年であった。

そういう問題意識の下、私は「都市法政策」という講義の中で、「戦後56年」をキーワードとして考えるべき諸問題を、『宋家の三姉妹』（1997年中国映画）や『パール・ハーバー』（2001年）などの映画ネタを駆使しながら、学生諸君に語りかけた。

<映画『ホテル』の鑑賞とテレビへの登場>

高倉健と田中裕子主演の映画『ホテル』は、2001（平成13）年、「ホテル」製作委員会に結集した人々の努力の下に、降旗康男監督の手によってつくられた。私がこれを観たのは2001（平成13）年の6月2日。東映会館という、キタの新地の入り口にある大きな映画館だった。観客は、私の予想（期待）に反してガラガラ。しかも、観ているのは年配者ばかり。若い人はほとんどいなかった。

私は、この『ホテル』という映画のストーリーはあらかじめ頭に入れてなかったものの、「特攻隊」の存在やその隊員達の生き様、「知覧」という特攻隊基地のあったまちの存在、「知覧の母」と言われ、特攻隊員から慕われた鳥浜トメという富屋食堂の女主人の存在などの予備知識はあった。そして、『鉄道員（ぽっぽや）』に続いて、高倉健が渋い演技を見せてくれる、いい映画だろうという程度の期待は持っていた。そして実際は……。とにかく、泣けて泣けてどうしようもなかった。特に、鳥浜トメを演ずる芸達者な奈良岡朋子の語りや、朝鮮民族でありながら日本軍の特攻隊員として死んでいった金山少尉（小澤征

悦)が、最後に故郷の歌「アリラン」を歌う場面などでは、涙が出てくるのをどうしても止めることができず、ハンカチが本当にグショグショになってしまったほどだ。テレビのコマーシャルでよく見た、高倉健演ずる山岡秀治が、最愛の妻知子(田中裕子)に言う、「俺とお前と、2人で1つの生命じゃろうが・・・」というセリフも本当に決まっており、涙を誘う。

この映画『ホタル』は、今年(2002年)も8月15日を迎えようとしていた直前の8月4日、テレビの「日曜洋画劇場」に登場した。

<テレビ番組『知ってるつもり』での紹介>

「知覧の母」鳥浜トメの物語は、2001(平成13)年7月22日放映のテレビ番組、『知ってるつもり』でも詳しく紹介された。22歳の宮川三郎は、「きっとホタルになって帰ってくる」と言い残して、特攻機に乗り、飛び立った。すると、その日の晩、本当に1匹のホタルが富屋食堂を飛び回っていた・・・。

鹿児島県の知覧にある「特攻記念館」。ここには、数多くの特攻にまつわる事実が保存されている。ここに保存されている資料はすべて、日本人とりわけ日本の若い人たちがしっかりとその事実を見据え、後世に語り継いでいかなければならない大切な事実だ。

昔、東宝では毎年8月15日が近づくと、終戦記念日記念作品として、三船敏郎主演による戦争にまつわる大作映画がつくられていた。たとえば、『太平洋奇跡の作戦 キスカ』(1965年)や『日本のいちばん長い日』(1967年)、『連合艦隊司令長官 山本五十六』(1968年)、『日本海大海戦』(1969年)、『激動の昭和史 軍閥』(1970年)など。私は、これらの映画を観る中で、毎年、日本にとっての1945年8月15日や、私にとっての8月15日を考えてきた。この『ホタル』という作品は、この終戦記念日記念作品のシリーズではないが、1945年8月15日を考えさせてくれる格好の教材だ。

<大連・瀋陽・旅順旅行、そして西安・敦煌旅行>

私はひょんなきっかけから、2000(平成12)年8月10日～14日、大連、瀋陽、旅順を旅行した。また2001(平成13)年8月9日～14日、西安、敦煌を旅行した。その詳細は、私のホームページの「趣味のページ」の「旅行記」を参照されたい。私はこの旅行の中でも、ずっと8月15日を考えてきた。特に、瀋陽で見た「9・18事変陳列館」。この、私がつぶさに見学した記念館では、私が旅行した翌年の2001年9月18日には「中日戦争を忘れてはならない!」という「うたい文句」の下に70周年記念の大集會が開かれた。また、2001年の西安旅行中は、小泉総理が8月15日に靖国神社へ参拝するかどうか、国内外(特に中国と韓国)の注目を集め、大論争となっていた。そし

て、私は帰りの飛行機の中で、小泉総理が8月13日に「前倒し」的に靖国参拝したことを知った。

このように、私の2000年の瀋陽と2001年の西安の旅行は、単なる物見遊山ではなく、日中戦争や1945年8月15日の意味を考える上での重大な学習の場だったのだ。

<映画『ホテル』鑑賞のおすすめ>

本稿では、この映画のストーリーに詳しく触れるつもりはない。とにかくよく出来たストーリーだし、心が洗われるような映画だということだけ言っておこう。とりわけ、①山岡の戦友で、山岡と同じく特攻「生き残り」の藤枝（井川比佐志）が、昭和という時代の終わりと共に極寒の八甲田の冬山で命を絶ち、その孫娘が藤枝の残したメッセージを頼りに1人、鹿児島島の知覧を訪れるという導入部や、②金山少尉が残した遺品を届けるため、山岡夫婦が韓国に渡る決心を固め、金山少尉の実家でその遺族たちと語るハイライトの場面、そして③全編をつらぬく、あと1年半の命と宣告された妻知子と山岡との純朴で美しい夫婦愛、など、とにかく非のうちどころのない、パーフェクトな出来映えだ。

この映画を観て涙しない人はいない筈だ。そして、その涙こそが今の日本を考え、日本人を変えていく原動力になるものだと私は考えている。是非、多くの人にこの映画（ビデオ）を観てほしいものだ。

2002（平成14）年8月19日記